

2023年 (令和 5年)
 3月号 (No. 934)
 公益社団法人
日本山岳会
 The Japanese Alpine Club
 定価 1部 150 円
 会員の会報購読料は年会費に
 含まれています
 URL ● <http://www.jac.or.jp>
 e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

第2回GHT踏査レポート(下)難関スリー・コルを越えクープへ… 1
 山岳地域における持続可能な
 開発会議とネパール観光……………5
 追悼 山岳写真家 岩橋崇至を悼む……………6
 追悼 石原國利さん追悼……………7
 植村直己冒険賞は「北海道分水嶺積雪期
 単独縦断」の野村良太さんに……………8
 連載 ■ ご当地アルプス登山案内
 ⑨ 須磨アルプス……………9
 ⑩ 上郡アルプス……………10
 東西南北……………12
 支部だより
 北海道支部 / 神奈川支部……………13
 図書紹介……………15
 会務報告……………17
 新入会員……………18
 図書受入報告……………18
 ルーム日誌……………18
 会員異動……………19
 INFORMATION……………19
 編集後記……………19

▶ 日本山岳会事務(含図書室) 取扱時間
 月・火・木…………… 10~20時
 水・金…………… 13~20時
 第2、第4土曜日…………… 閉室
 第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時

第2回GHT踏査レポート(下) 難関スリー・コル越えクープへ

吉井 修

第2回GHTもいよいよハイライト。東海支部ゆかりのマカルーBCを訪れた後には、「スリー・コル」と呼ばれる難関、6000m前後の峠越えが待っていた。残念ながら1名がリタイアしたが、3名の隊員はトレッキング・ルートとは思えない困難な峠の登下降をクリア、待望のエベレスト街道に到達したのだ。

マカルーBC到着

11月2日ランマレ・カルカ〜3日
 マカルーBC〜4日スイスBC
 5-6日シェルパニ・コルBC
 7日シェルパニ・コル下〜8・9
 日バルンツェBC〜10日アンブラ
 ブツァBC〜11日イムジャ湖畔
 11月2日、3557mのヤング
 リ・カルカを出発して、マカルー
 BCへと向かう。バルン溪谷を遡

つていくが、マカルーBCまでは往復するトレッカーがそれなりの数いるので、整備された良く踏まれた道であった。欧米人だけでなく、ネパール人のトレッカーにも出会った。ネパール人にもガイド・ポーターとして働いただけではない時代がやって来ている。
 この日はランマレ・カルカ(4410m)の小屋に宿泊。この小屋では独りでマカルーBCを往復し

てきた英国人女性に出会った。藤井さんと小屋の焚火場で歓談したが、彼女はウルトラトレイル・デュ・モンブランで5回も優勝しているという。小さな荷物で着の身着のまま。この後、新しいトレランコースを求めて南の方へ迂回し、エベレスト街道の方まで走っていくという。世の中には強者がいるものだ。

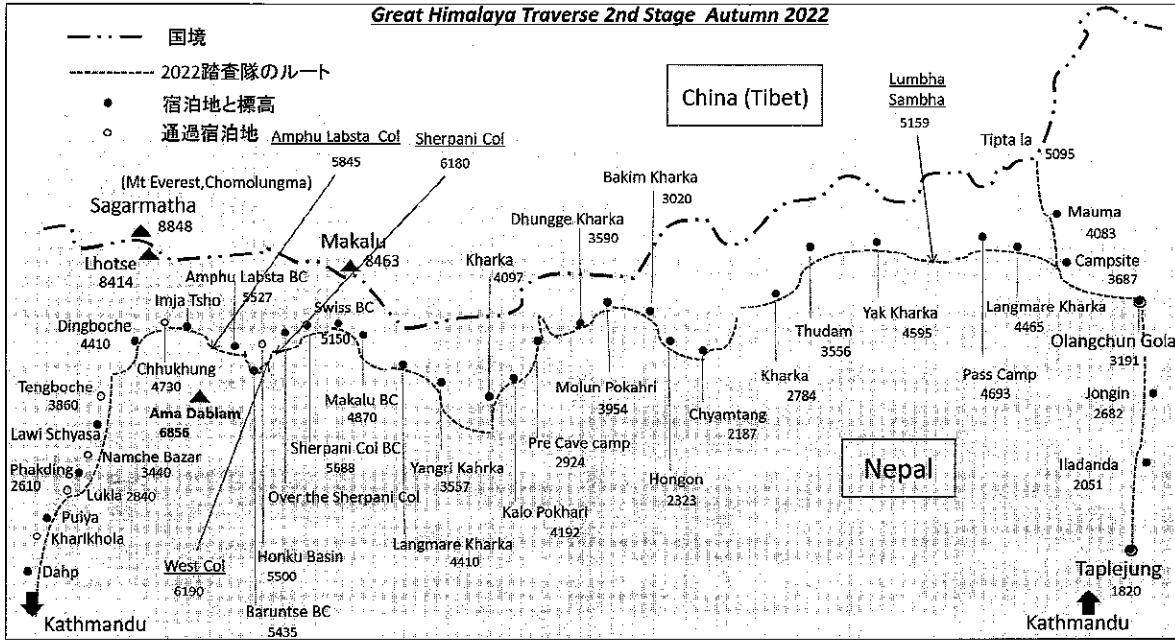
翌日、ランマレ・カルカを出ると、ピーク6をはじめヒマラヤ驍のすばらしい6000m峰が現われ、景色が変わってくる。11月3日(歩き出してから26日目)にマカルーBC(4870m)に到着した。1970年に日本山岳会東海支部が初登攀(マカルー登頂自体は第2登)した東南稜が間近に見える。せり上がる東南稜の先にマカルー

頂上(8463m)があつた。さすがの姿だ。

スリー・コルを越えて

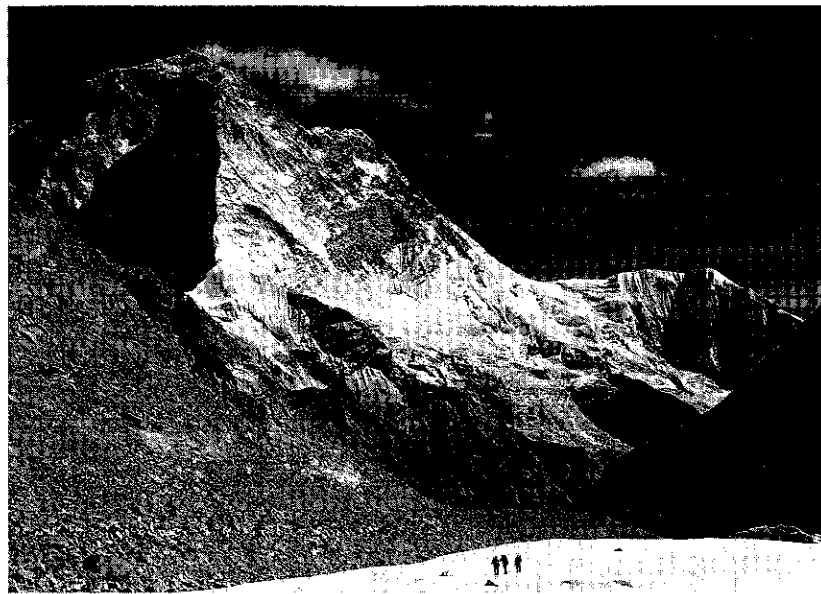
さて、ここからの1週間が正念場のスリー・コル越え。その後、1週間でエベレスト街道を下りていくことになる。

ヤングリ・カルカで1日休養したので、マカルーBCでは休養を取らず11月4日出発。マカルーBCから先に進む人はぐつと少なくなる。バルン氷河のモレーン上を登っていく。高度は5000mを越えて、スイスBCが近づくころ、バルン氷河の奥にローツェ、そして、その右奥にエベレストが見えた。私はエベレスト初見参である。この日はスイスBC(5150m)泊。



5日は途中からバルン氷河を離れて左の谷へ入り、岩がゴロゴロの山腹を縫って登り、シェルパニ・コル(5688m)へ入った。この日は高度のせいもあつたが結構な悪路で、相当のアルバイトを要した。1日休むことになり、7日がいよいよシェルパニ・コル越えと決まった。6日の休養日、キタツプ以下4人が偵察に出た。「シェルパニ・コルの取付ま

でフィックスはない。コルから下りるとき、荷物はロープで降ろす必要がある」との情報もたらされた。7日は8時過ぎに出発。氷河を右手から登り、雪上に出た所でアイゼンを装着した。後は広い雪の谷を前方の鞍部目指して登っていく。背後にマカルーが堂々たる姿ですばらしい。12時20分、シェルパニ・コル下に到着。このとき前に登ってきたイタリア隊の隊員ら5名が先に取り付いていた。先行していた両隊のポーターが、コルからの荷降ろしで渋滞しているという。30分待つて出発。ワイヤーロープにセルフブレイを取り、フィックススロープにアッセンダーを装着して登っていく。高度があるので、セルフブレイの取り直しにも息が



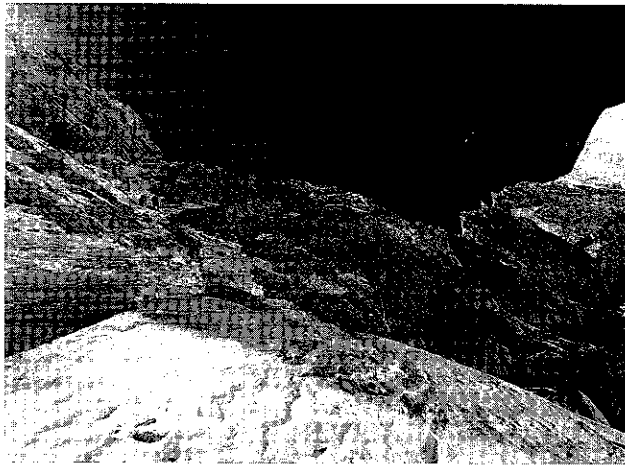
マカルーをバックにシェルパニ・コルへ向かう

上がる。焦るな焦るなど言い聞かせながら、一步一步確実に、ゆっくりゆっくり登り上がった。13時30分、シェルパニ・コル上(6180m)に立つと、その向こうにチャムラン(7321m)やバルンツェ(7152m)のすばらしい光景が眼に入ってきた。ウエスト・コルに続く広い雪原に目を見張る。

両隊の荷降ろしで渋滞していて、コル上に1時間20分もいた。コルの下りはフィックスロープ伝いに、ビレイだけでなんとか下りることができたが、荷降ろしの苦勞があり、スリー・コルの中で最も通過に時間を要した。全員がコルから下りたのはもう16時30分。すぐコル下にテントを設営。急激に寒くなり、逃げ込むようにテントに入ったのは17時30分であった。

残念、1名がリタイア

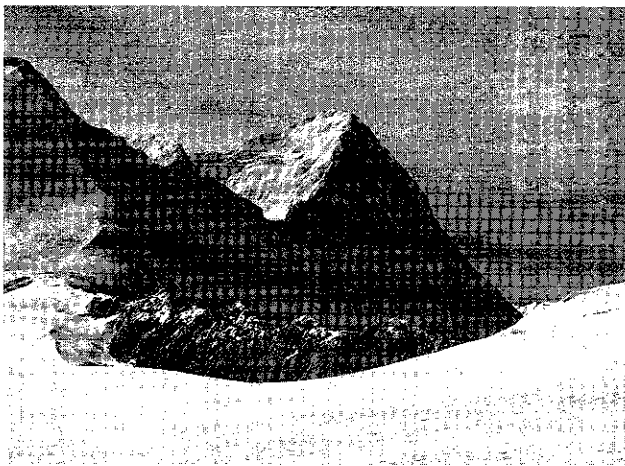
翌8日はウエスト・コル越え。



通過に時間を要したシェルパニ・コル

9時30分、テント場から10mほど登ると、そこは広大な雪原。ここは全行程中のハイライトとも言える場所。背後に越えてきたシェルパニ・コルとマカルー、右手にバルンツェ、左後ろにチャムランという絶景。まさに空中散歩の感で、私は喜びをかみしめながら歩いた。しかし、昨日の6000mを越えるシェルパニ・コルの登降で消耗されたのか、最後尾の藤井さんの歩みが遅い。

ウエスト・コル(6190m)は雪原から一段低いようにも見える



トラバース中のハイライトだったウエスト・コル

所で、コルそのものの登りは10mほど。11時15分、コル上に立った。下りは懸垂下降。重廣さんが「同じようにセットするんだぞ。丸尾さんにも伝えるんだぞ」と言いつつ先行された。徐々に斜度は緩くなつたが、50mのフィックス3本を懸垂下降で下りた。最後に斜めにビレイのみで1本。これだけの距離を懸垂下降で下りるのは実は初めてのことだ、私は緊張感で胸いっぱいだつた。

しかし、ウエスト・コルを越えた西側も抜群の絶景。アマ・ダブ

ラム(6856m)の威容がひとときわ目を引く。周囲の絶景に励まされつつ頑張つて下つて16時50分、バルンツェBC(5435m)にたどり着いた。バルンツェBCには営業小屋があり、常設のテントも張られていた。私たちは自分のテントに泊まったが、食事は小屋のダイニング・テントで、小屋のものをオーダーし

て食べることになつた。

藤井さんの消耗が激しく、夕食時、明朝起きて行動することが難しいようなら、救助へりを呼ぶことに決まる。明日を休養日とする選択もあるのでは、と思えたが、「この高度で1日休養して良かった試しはない。明朝動けないようなら、一刻も早く下りるのが得策」という判断であつた。

結果、翌9日は朝から衛星電話を通じて救助へりを手配、歩き始めて32日目、藤井さんは先にカトマンズへ向かわれた。また、この日の未明、シェルパニ・コルで行っていたイタリア隊の30歳台のポーターが、心臓発作で亡くなるという悲しい出来事があつた。やはり6000mの世界、一つ間違えば、何が起るか分からない。この日は藤井さんのリタイアと、イタリア隊の遺体収容のため2台のへりを見送ることになり、停滞日となつた。

最後の難関アンブラブツァ

翌10日からは3人での行動。アンブラブツァBCまでは氷河を下り、美しいポカリ(池)のほつりを歩く、なかなかの景色の行程。ア

ンプラプツァは最難関との認識だったが、メラ・ピークとアイランド・ピークの2峰を一気に登る意欲的なトレッカーが通過するといふ。前2つのコルに比べ通過者が多いので大丈夫だ、とラムカジが言う。何よりもアンプラプツァを越えたら、後はエベレスト街道まで駆け下るのみ、安全圏に逃げ込める。そう思うと明日が待ち遠しかった。アンプラプツァBC(5527m)にも営業小屋があった。

11日8時30分、BCを出発。コルを目指して、とにかく一步一步登る。コルの登りとしては一番しんどい。フィックスロープが張られた岩をアッセンダーで強引によじ登ると、雪が出てきた。11時20分、アイゼン装着。装着してから懸垂



トレッキング・ルートとは思えないアンプラプツァの下り

氷河を横に30分ほど登ると、アンプラプツァ(5845m)であった。休まずに早速下りにかかる。眼前にバルンツェ、それに続く尾根がぐくぐつと弓なりに下がっている。その横を急激に下りていく。少し下って懸垂下降。最後の1本であったが、これまでのどれよりも傾斜がきつい。重廣さんが下りられるのを待つて次が私。まっすぐ下りると、少しハンクして宙に浮いてしまう。「重廣さん、どこを下りられましたか」と叫びながら、やや左寄りに下りてなんとか着地することができた。ああ、助かった、もう大丈夫なんだ、と安堵感でいっぱいであった。通過者は多いというものの、やはりアンプラプツァは最後にして一番の難関。

「これはトレッキング・ルートとは言わんなあ」と言い合った。

12-13日 デ
インボチエ
14日 フウ
ササ 15日

バクティン 16日 バイヤ 17日 カ
ーレとブクサの間からジープ

アンプラプツァを越えてからも長かったが、途中で1泊テント泊。12日、チュクンを経てエベレスト街道のデインボチエ(4410m)まで下りた。チュクンの手前、アイランド・ピークから戻ってくる道と合流すると、そこからは世界のトレッカーがいっぱい。チュクンではウクレレを奏でる西欧女性に目を奪われた。

後はエベレスト街道。重廣さんが昔の面影全くなし、と言われる賑わいぶり。私もちよつとびつくり。山小屋やレストランが立ち並び、空にはひっきりなしにヘリが飛ぶ。プロパンガスをはじめとするおびただしい物資が、ヤクやロバに担がれて登っていく。疲れた体ではあったが、安全な道ということゆつくり下った。ルクラからの空の便は避けて、ジープに乗れる所まで下って、「カトマンズの男」となった。

皆さんのご支援に感謝

長い山旅を完遂するには、怪我や故障を起こさないことが第一である。前回の第1回GHTで、私

は重廣隊長が40日間にわたる歩行の中で、尻もちはおろか一度も手をつかれるのを見なかったことに驚いた。私などは1日に1回やそこらは手をつけてしまう。今回、私は勝負になるスリー・コル越えの前、マカルーBC(計画では歩行28日目、実際には26日目)に到着までの道のりを、とにかく怪我なく着実に歩くことを第一の目標とした。元の勤務先のトレッキングの会の仲間が、饞別に八咫鳥(ちようど)W杯カタル大会の年でもあった)のシューズ・プレートをアレゼントしてくれた。ありがたいことに、靴紐に通して靴の前部に着けたこのお守りは、足を踏み出すたびに目に入り、一步一步、慎重に行け慎重に行けと導いてくれることになった。結果としては、40日間歩いて手をついたのは3回、うち1回が尻もちであった。

急激な円安やネパール国内の事件費や物価高騰で隊の経費がかさむなか、本会会員の皆様をはじめとする多くの方々から、たくさんのお貴重な支援(寄付)を賜った。最後に、今回も多くの山仲間の応援に支えられてのGHTであったことを記して、御礼としたい。